

トラック1 プロローグ

*主人公(兄)から駅に着いたと連絡があり、走って駅へ

「おーい、兄さん(遠くから呼びかけてる)」

「はあ、はあ、

ちょっと待って、深呼吸するから」

(深呼吸)

「うん、もう大丈夫」

「おかえり、もうしばらく会ってなかつたけど、
私のことは覚えてる?名前ちゃんと言える?」

「その顔、やつぱり・・・

兄さんのことだからそんなことだらうとは思つてたけど...」

「雛子、昔毎日のように遊んでた雛子だよ」

「冗談つて・・・あのさあ

全く、そんなんだからおばさんから縁談なんて紹介されるんだよ?」

「はあ、私の期待を返してほしいよううん、なんでもない」

「それについて中々の大荷物だね、

たつた2、3日泊まるだけなのにそんないる?
あつ!もしかしてこっちに帰つてくるとか!?」

「お土産？あー、そつか

あそこみんな顔見知りだもんね

そりやあそんな量にもなるか（呆れ）」

「ほら、手に持ってる荷物貸して

そんな重たそうにしてるとこっちまでしんどくなっちゃうよ」

「それに、ついたばかりで疲れてるでしょ？私も少しくらい持つよ」

「もうっ、子供扱いしてー（怒）

私だって来年には大学で立派な大人なんだから
このくらい大丈夫だよ」

「何？」

あー、そもそもそうだね

ずっと駅で話してもあれだしそろそろ行こうか」

「あっ、少し遠回りしていい？」

帰つてからだと叔母たちとずっと話ちやいそうだし、

今のうちに色々と聞いておこうと思つて」

「ありがとうございます、じゃあ行こつか」

（～～～～～～～）

「おばさん心配してたよ？」

東京に行つてから一度も帰つてこないし、連絡はたまにしかしてくれない～って」

「どうして今年は帰つてこようと思ったの？そんなに忙しいの？」

「今の仕事」

「あつそういうわけではないんだじやあなんでだろう」

「うん？いや、叔母さんからは何も聞かされてないよ

雛子が暴れるからダメだって言われて…そんなに大事な事情なの？」

「縁談!?お兄ちゃん結婚するの!?相手は私の知ってる人!?」

「ああうん、そうだよね

まだ決まったわけじゃないんだよねごめん取り乱したりして」

「あれっ、そうなの？」

兄さんの浮いた話は全然耳にしないから応えると思つたよ
はあ～（安堵のため息）」

「なんか安心したらお腹空いてきちゃつた
兄さんはもうお昼食べた？」

「そつか、なら私が作るよ

去年あたりからずっと叔母さん練習してるから兄さんの口にも合うはず」

「メニューはまあ、夏だし冷やし中華あたりが無難そうかな」

「うつ、痛いところを・・・

たしかに麺の上に切った具をのせるだけだけど、

一応料理です！なにか不満でも!?」

「はい、兄さんもそれでいいよね？」

「兄さん？って聞いてないし・・・」

「そんなあちこち見渡して、懐かしい？」

まあそつか、2・3年ぶりだし色々と見たくなるのはわかる
でもなんにも変わらないよ？」

「ふふつ、そうだね

たしかに空き地はかなり増えたね（楽しそう）」

「ここもだいぶ廃れてきたよ

私も兄さんみたいにそろそろ出た方がいいのかって
つい考えちゃう（苦笑）」

「うん？ああ、そうだね

もうすぐ家につくし、私は先に帰ってご飯の準備してくるよ」

「その間兄さんは縁談で何話すか考えといたら？」

それと、相手の方に失礼のないようにね！」

「それじゃお先に、またあとでー」